五月の自然界

端午の節句が來て、男兒のある家には、幟や旗や冑や刀や槍や、鐘馗も、勇士人形なども、まつられて、青々とした菖蒲が香り高く軒端に飾られて、ちまき、柏餅、など製らるゝ頃になると、思ひ起すは。

養蠶のことである、殊に信濃上野下野群馬邊の人々は樂んで、桑摘を始めたであらふ。山城の宇治の邊では、名高き茶摘が始まつて、人々はさぞ忙はしいことであらふ、忙はしい中にも、能く勉めて後の暫しの間の休みには、どんな心持がするだらふ。自然の間に働き、自然の間に休ひは、樂いものである。

青き、白き、黃の　瓜類の種も、細き、長き、短き、大角豆類の種も　刀豆や、早小豆なども、ぱつ〳〵蒔かるゝであらふ。小さな種から、成長させて美しい花を咲かせ、豐かな實を結ばせる、園藝は樂いものである。

藤の花の細かき葉の間より長く垂れたる、躑躅の高く低く咲きみだれたる、牡丹の大なる花の軟らかき葉の間に開きたる、山吹の鮮かなる綠の莖に貫かれて黃金色に咲き匂へる、公孫樹の若葉の黃色なるに、松榧の深綠のいよ〳〵色まさる、人氣稀なる山里の自然界の光景は、殊に樂しいものである。

月の廿一二日頃の汐干には、松風涼しき濱邊に立つて、清らかなる波に足を洗はれながら貝拾ひ、際涯なき沖を行かふ白帆の見晴しなど、海邊

の眺望は一種ひろ〳〵とすが〳〵しき感を與ふるものである。

此樂は、大人も、子供も、男子も、女子も、共に樂むとが出來る、小供には小供相應に樂むやうに慣れしむるとが、後の爲に大事である。

殘りの花をたづねて、蜜蜂は、尙忙がはしげに働き、眞面目なる蟻は、怠らず貯蓄にはげみ。降る雨に、厭ひなく、づぶ濡れになつて、四十雀は、蟲をくわへて常綠樹の繁みの中に入り、暫くして出でゝ、此方の樫の木の枝にて身振して露ふりはらひ、又も彼方に飛んで行く、繁みの中の巢の內には、黃色の口を開いて待つ五つの雛があるからである。

此樂みは、大人も子供も共に見て樂むとが出來る、併し子供の心には、憐憫に富んだところもあり、大人が見て殘忍とするところもある、兎に角、何にか活動して居らねば滿足出來ぬ樣子が見ゆる、從つて通常の頑是なき子供は此雛を見たならば、如何するか、或は戲れに　或は可愛らしさに、動すれば殘忍の行をする、願くは、子供の時代から、小鳥が樂んで育てゝ居るといふことを知つて、それを傍觀して其中に樂を求むるやうに躾けたい。

全體、邦人は武勇の氣象が盛なる中に、やさしいところが多い、深山の奧の樵夫が脊負つた薪に櫻の花枝をかざして歸るとか、九尺二間の茅屋の窓下に缺徳利に楓の枝の挿されたるとか、中々やさしいものである、望月の、東の方、山の端より、青深く澄み渡りたる蒼穹にさし昇るに、足とめて見とるゝ人力車夫も少からず、咲き初めし山百合を刈り殘して歸る草刈乙女も少くはなし、しばらしき心地する。

唯折りとるといふことは、我手近におきたいといふ心で、感賞のあまりならむなれど、願くは據な

き場合の外は、常に少し隔でゝ眺望歡賞するやうにありたいものである。

人の品性の骨髓をなすものは、精神の傾向である、品性は又人の嗜好にも、大關係をもつて居る、傾向及び嗜好は、社會の事情、境遇、教育などによりて如何樣にも變られぬとはない、夫故に、自然界に對して、嗜好をもつ樣に、子供に心懸くるは、其一身の將來の爲のみでなく、それが即ち國家の爲であると思へる。殊に現在の社會の情況を見ても感ぜらるゝことが多くある。

（麼訶生稿）

「女といふものは」

女子といへば直に小人を聯想し、女といへばすぐ罪深ものと聯想せらるゝ以上は、婦人の地位所詮未だ甚高からずと知らざるべからず。現今女子教育の隆盛婦人社會の活動又こゝ十年前の比にあらず、然も一般社會の婦人社會に同情の薄きこと亦依然としてもとの如し。「女といふものは」なる一語は、社會が我婦人に向つて何か歎息の聲を發する時に當りて常に第一着に使用せらるゝ概括語なり。如何に無量の輕蔑の意味が此一語の中に含まるゝよ。「どれほど學問しても女といふものは」との語は、まことに屢々吾人の聞く所にあらずや。この不祥の一語、まさに以て今日の我婦人社會を概括し去る。この一語の存在せる以上は、永劫婦人の地位の上らざるものと知るべし。

女偏の字

奸、嫉、妬、怒、奴、妄、姦、佞、婬、婪、娼、妨、嬉、嫖、娼等、擧げ來れば、女と云ふ字を偏として出來たる文字の、如何に多くが、あらゆる不德の意義を顯はせることかな。支那人が女に對する思想の如何は、これによりても推知するに難

からざるなり。

（敬華生稿）

机邊餘錄

▲今日の社會が、婦人に向つての注文の數の多いも同時に、非難の數もまた、まことに多いが、男子に向つての注文非難と云ふものは、甚少ない。主婦としての今日の我婦人ははたしてそれほど不完全で、家長としての今日の我男子ははたしてそれほど完全にできているのであらうか。

▲嘗て、廢娼論者として有名なりし、某代議士がひそかに、賣女の衢に遊んだのを、友人に見つかつて、其言行の相反するを非難せられた時、其代議士が次の如くに答へたとか。『社會のためには、僕は、廢娼を主張するが、自分一人のためには、存娼の方が都合がよいのである』

世の中には、隨分かくの如き、廢娼論者に似た人か、澤山ある樣だ。

▲誰だつたか、こういふことを、云つた人がある。我邦の婦人と、眞實に中正な交際をするのは、まことに、六かしい。一體が、疑深くつて、己惚が強くつて、おまけに、怒つぽいとさているのであるから、堪つたものでない。男子から少し深切にして、やさしくして、そして、洒落にして、打明けて、交際して行くと、婦人の方で嫌、もう、それを、變に取つて仕舞つて、何だか妙に疑ぐつて來る。これでは、いけないと思つて、今度は、男子も、用心してかゝつて、極めて淡泊と、無頓着に、諸事萬端一切構はず、餘計な口も利かぬ樣にしていると、さあ今度は、酷い。男子は、輕薄だとか、横柄だとか、妙に氣取つてるとか頓とあらゆる惡口の批評を受けるに至るのだと。

▲つねづね親密に交際してる男同士では、こゝちから訪問して行つた時分に、向の方では、妻君も一所に出て來て、饗應てくれる樣であると、新

密の情が、一層まさしてくるものだ。

▲また、饗應を、受けるにしても、親密の間柄では下手な料理屋から、とりよせられた御馳走よりも、わが親愛な友の妻君が、ご自身で、料理せられたのを出して貰らた方が、どれほど嬉しく感じるかも知れない。

▲夫かと云つて、料理の道も、一向に御心得なく、客が來たからつて、急にどこかで出版の何々料理法大全などゝ云ふ安價の書物を引張り出して、今まで一度も、お慣へになつたご經驗のないのも構はず、活字の間違なども、委細御頓着これなく、如何御手料理だからつて、こんな具合で以つておだしになられると、夫こそ、まことに、有難迷惑の場合もあるものだ。

▲いかめしき洋服男の、併も、肩の邊から、背中へかけて、一面にふけの粉が散らばつて、一見した所、恰白灰をふり撒いた樣なのに、よく出遇ふが、時としては、フロックコートの襟裝の褶の邊に、埃が山の樣に堆積して居るのを見ることも、少くない、何がシミツタレだと云つて、之れほどシミツタレに見ゆることは、まづあるまい。

▲それでも、これが二十歳前後で、まだ細君も持たない血氣の若者でもあつて見れば、別段氣にも、とめないのだが、もー四十前後で、一廉の紳士であつて見ると、その紳士の風采は、とに角、第一家を治ひる夫人の氣心が見透いて、こんな細君を持たれた男が寧氣の毒の樣に思はれる。

▲交際上、最心得なければならぬ、秘訣は、第一他人の惡口を云はぬことである。とかく人といふものは、他人の惡口をいひたがるもので、これがまた、妙に愉快に感ずる。甲乙二人よる、殊に他に話の種がない、すると直内の噂が出る、それがいゝ噂といふことがまことに少い。謂はないでも宜のに惡口を云ふ。甲乙に取つて、丙が別に恩怨

あるにあらず、惡口をいふに依つて、甲乙共に利する所もあるでない。然も其人の缺點を擧げて、滔々と咄し合ふ。壁に耳ある譬、何時となしに、これが丙の耳に入る。そこで遂には、恩怨もなかつた丙と、一生癒すべからざる恩情の衝突となつて仕舞ふのである。

▲どんな缺點多人でも、どこかに取り所があるものだから、人の噂をするならば、どこかその美點をさがし出して、噂をするのが日々交際上に心得るべき秘訣である。（つゞく）　（擊水生稿）

見聞錄

●去る月の上旬の或日、新橋停車場のプラットホームに見送りたる人々は林の如くに立ち並んで居る、滊笛の合圖で愈滊車がゆるぎ始めた時に人々の視線は盡く其送らるゝ老先生の方に向うて何れも名殘惜しげに出來る丈列車に近寄りて見送つて居る、其長き列の背後に殆んど人目につかぬ處にて悄然として行儀正しく見送つて居る十二三の小學兒童があつたとつ國の旅路に向ふ老先生も、若し御目に止まつたならば、さぞ頼もしきとと感せられたであらふ。

●同じ月の末、我近隣に第七師團の補充兵として北海道に行く人があつた、旗や幟を押立てゝ親類緣者さては隣の人々は樂隊の奏樂と共に勇みに勇める而かも里を離るゝ一種の感じの蔽はれがたき當人を上野の停車場に送つて出かけた、後に殘つたのは母と妹との二人で、家の内は今の今までとは反比例にいたく靜まつて寂しきが一入である、母は得堪えで内深く隱れて終つた、妹は健氣に行く人の後影を見送つて居る、長き列が角を廻つて兄の姿が全く見えなくなつた時。ふりかへりて四邊に人氣なきを見て、急に雙の袖でパッタリ顏を蔽うて駈け込んで疊の上にうつ伏した、斯樣な同胞

がありと知らば兄たる兵士も嘸奮發するであらふ、と遙か此方の堤の上にて友人と共に語つたとであつた。

●佛式のさみしき葬送の列がしづ〳〵進んで行く、彼方よりいかめしき顏したる紳士は前曳つきの人力車で列を横切つて乘越した、葉卷きの煙草の煙が風に曳かれ居る元氣といへば元氣だか知らぬ、其處へ向ひの學校から出て來た十一二の少女が道の側に立ち止まつて肅然として柩に對して敬意を表せられた、我は限りなき敬意を更に此少女に表せざるを得ないと涙ながらに語る遺族があつた。

（澤生稿）

可憐の手紙

このごろは、ふかうら（深浦）も、ゆきは　すこしもありません、てらのにはには、まつのはは、みどりのいろになつて、みさたゞしき　おんなのやうなかたちをしてゐます。もみぢのはも　そのまつのはのやうなかたちでございます。

わたくしは、いままで　あなたをみたくて　みたくてゐたのにわたくしは　あそぶ（び）にいゞてまへ（ひ）りましたら　わたくしの　おつかさんは　さださん　これこれ　てがみはきましたよ　どなたの　ところからきたのでせうと　おもふて　わたくしはみますと　あなたのところから　きましたのでみますと　いろ〳〵のことばかり　かいで（て）をるので　そのこもりさんだつ（ち）にきくと　だれもいかないといふひとは　ひとりもありませんから　ふかうらへ　きてください　わたくしは　みんななかよくして　べんきやうをしてゐますから　どをかまた　をしへてください　五月にくると　をもふてまつてゐますから　このてがみのやうにしてください。（中畧）

わたくしこも　ほとけさまの　おしへをしらんひとは　どんなこともいひますけれども　わたくしは　ほんとにしない　あなたのいふことを　みんな　ほんとにしてをります　さやうなら

四月五日

花谷さだより。

こは、青森縣深浦の福田會（前號掲載）子守部の一生徒にして當年十二歳なる、花谷さだより、目下當地に來りて　奔走中なる　同會長千崎師に向つて贈したる書面なり。無學無教育なりし幼少

の子守女の、かばかり　長き書面を　認めたるさへあるに　師を思ふ切情誦然として、紙上に溢れ、其速に歸り來りて　更に敎を垂れんことを乞へる一節の如き　如何に　師が平生全心を傾けて愛育せるかを窺ふに足らん。　（牧羊生稿）

（侯爵山内家婚禮式之内）

御神床之次第

石井泰二郎

雄蝶花形瓶子　置鳥

木彫彩色下臺模樣野草

衝重（御紋附白繪松竹鶴龜）

奈良蓬萊

白繪御紋附松竹鶴龜衝重　下机

置鯉

右同　下臺模樣水草

雌蝶花形瓶子　衝重（右同）

右は禮節師範松岡止波子の調進されし御式中の一部なりしをつげるまゝしるしつ

●女子高等師範學校生徒募集　同校にては今回私費國語漢文專修科生四十名を募集し、來九月十一日入學を許可せらるべしと云ふ。該科は修業年限一年七ヶ月にして、師範學校女子部高等女學校の國語漢文科の敎員たるべきものを養成するものにて、既に本年三月三十日を以て第一回卒業生を出し、夫々地方に赴任して、中等敎育に從事せしむと云ふ。入學志願者は品行方正身體健全にして、修業年限四箇年の官公立高等女學校卒業生若くは之と同等の學力を有し、年齡十七年以上三十年未滿にして、夫を有せざる者の由にて、本年六月十